INFORMATION

寺子屋トーク

第34回「東京VS大阪・都心暮らしの愉悦 ～あなたのまちのタウンマネジメント入門」

「都心再生」のかけ声とともに、いま本格的な都心回帰の波が起こっています。

都心の持つ潜在的な可能性に加え、新しいコミュニティの価値をどのように作り出せばよいのでしょうか。医療・福祉、教育、文化、芸術、ボランティア等々。大阪文化の中心・上本町をケーススタディしながら、改めて「都心に暮らす」魅力と展望について、語り合います。

●

9月28日（土）14:00開会（16:30閉会予定）

【ゲスト】森まゆみさん（作家）
渥美公秀さん（大阪大学大学院人間科学研究科助教授）
高田光雄さん（京都大学大学院工学研究科助教授）
弘本由香里さん（大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所客員研究員）

●

○会　場…應典院本堂ホール
○参加費…会員1,000円（一般1,500円・学生1,000円）
※学生は受付で学生証を提示してください。
※閉会後、ゲストを囲んで1コイン交流会もあります（参加費500円）
○主　催…應典院寺町倶楽部＋上町まちづくり推進協議会
○協　賛…都市基盤整備公団

●

★「みんなで歩こう！　まち歩き・見て歩き」

9月29日（日）13:00～16:00
上町台地の歴史や文化スポットを巡りながら、まち暮らしの楽しさを見つけるワークショップです。定員30名。参加無料。要予約。

コモンズフェスタ

11月4日からスタート!!
「対話のレッスン」～communication studies～

寺町倶楽部の毎年秋の恒例事業、「コモンズフェスタ2002」が11月4日～10日、開催されます。
このフェスタは應典院を舞台に、地域コミュニティの再構築を願って開催している、多様なNPO（非営利組織）とアーティストが相互に関わり合う協働の場。
今年のキーワードは「対話」。現代アートとの出会いをはじめ、映画の上映会やファッションショー、詩のオーケストラ、哲学カフェなど、約20の多彩なプログラムが展開されます。さまざまな出会いと、ゆたかさを実感する対話の積み重ねによって、「多様性を認め合う市民社会」の実現に一歩でも近づきたい、と思っています。ぜひ、ご参加ください。

いのちと出会う会

第22回　9月19日（木）「若者は“死”から何を学ぶのか」

話題提供者
奈良保育学院　野田隆生さん

野田さんは大学で教鞭を取る一方、佛教大学四条センター「仏教と看護を考える」世話人として、市民レベルで生死の問題を取り扱ってこられました。死が見えなくなった現代、私たちがそこから学ぶものは何か。若者に仏教看護を教えながら、ビハーラ、臨終行儀など、末期を支える仏教について語り合います。

※18:30開会、21:00閉会

【新入会員ご紹介】

（2002年8月10日まで）
前号以降にご入会いただいた方です。ありがとうございました。
○個人会員
【大阪府】
川端佐千子　吹田市
【兵庫県】
松浦善満　奈良市
【京都府】
野田　隆生　京都市

サリュ　VOL. 33
應典院寺町倶楽部のニューズレター
発行日　2002年8月10日（偶数月発行）
編集人　池野亮、大塚郁子、川井田祥子
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

Salut

應典院寺町倶楽部のニューズレター

vol. 33

サリュ
フランス語で救いの意

8月1日、日が沈む頃の大蓮寺墓地で「詩の学校」の授業があった。「ことばを選ぶとは人生を選ぶこと」という詩人・上田假奈代さんが應典院で4月から開講している学校の番外編だ。
死者の魂が戻るという8月。参加者は思い思いに散らばって詩作、朗読をした。手作りの行灯が点在する墓地で自分の中にいのちが燃えることを感じとったことだろう。自分と静かに対話を重ねながら、“ここに立っている自分”を取り巻くさまざまなつながりに思いをはせていた。

2002 .August

充実の夏、寺子屋トーク盛大に連続開催！

～“いま”を生きるゲストに魅了された2日間～

のぼりつめる暑さの中、應典院寺町倶楽部の事業が密度濃く展開されています。7月に寺子屋トークが連続して2回開催されましたが、おかげさまでどちらも盛況のうちに終えることができました。

熱気あふれる寺子屋トーク、2日間の概況をレポートします。

7月13日に開催された第32回寺子屋トークは、ミリオンセラー『声に出して読みたい日本語』の著者・齋藤孝さん（明治大学助教授）を迎え、「息を鍛え、芯を育む～子どもの身体感覚を考える～」をテーマに、第1部で、齋藤孝さんによる講演、第2部で、秋田光茂さん（パドマ幼稚園園長）、立野由美子さん（AMI〈国際モンテッソーリ協会〉公認治療教師、国際こども学フォーラム事務局）を交えてトークセッションを展開しました（参加者138名）。

終始、熱のこもったお話ぶりに参加者は魅了され、「第2弾をぜひ！」と要望される方が数多くいました。また、第1部の最後では「白波五人男」のセリフをお腹に力を入れて全員で朗唱した後、男女2人ずつ4名が前に出て模範朗読を披露。「美意識を感じられるハリのある声が、ハリのある生き方に通じる」という言葉を実感できるようなすばらしい一場面で、朗唱のワークショップ開催を希望される方も大勢いらっしゃいました。倶楽部の事業として、さらなる展開を検討したいと思っています。

以下は、当日参加された藤崎由紀子さんによる、齋藤さんの講演のまとめです。

齋藤 孝さん

1960年、静岡県生まれ。東京大学法学部卒。同大学大学院教育学研究科学校教育学専攻博士課程を経て、現在、明治大学文学部助教授。専門は教育方法・身体論。技化、スタイルをキーワードに身体論を展開中。また、呼吸法の研究でも第一人者。

研究の成果を実践する場として、小学校3年から6年の子どもを対象に、これまでの学習法やカリキュラムとは違った、本質的内容を効率よく身につける私塾・斎藤メソッドを展開、自然体で立つ方法や呼吸法といった「体育」と文章を朗誦する「国語」を合体させ、今の子どもが自然には身につけにくい「肚（ハラ）の強さとコミュニケーション力」を養うという実践は、多くの教育者の注目を集める。

著書に、日本人が失いつつある身体感覚を世に問う『身体感覚を取り戻す』（NHKブックス・第14回新潮学芸賞）、『声に出して読みたい日本語』（草思社）、『自然体のつくり方』（太郎次郎社）、『理想の国語教科書』（文藝春秋）、『人間劇場』（新潮社）など多数。

感覚を技化する

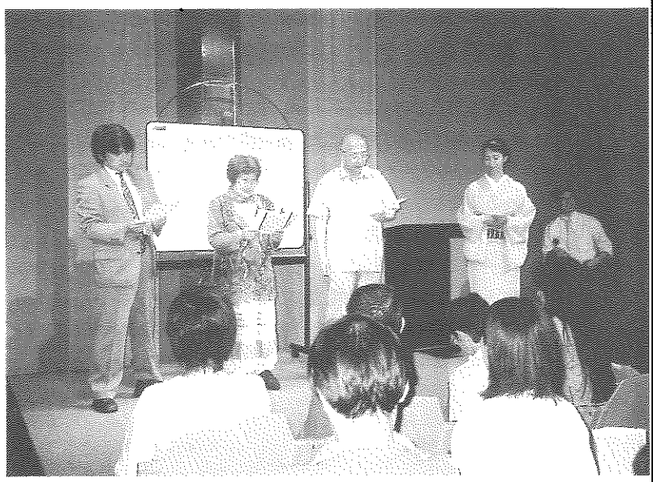
「喉もと過ぎれば熱さ忘れる」というように、感覚というものは一回ごとに生まれては消える瞬間的なものであるように思われがちです。けれども、辛口カレーの味も慣れると物足りなくなるように、感覚とは習慣的なものなのです。たとえば、自転車に乗れているときの感覚というのも、乗れたときの感覚を積み重ねることによって、その技を自分の中に定着させたものです。自転車に乗れているという基本の感覚が身についていると、その基本の軸からどのくらいズレているかがわかります。が、乗れている感覚のわからない人に、乗れる感覚というのは伝えにくいものです。

自然体の立ち方も、そういった技の一つです。ポイントは足の指を拡げることで、とくに、足の親指と人差し指の間を、下駄や草履の鼻緒が挟まっているように大きく拡げます。足の指で地面をつかむようにして立つ感覚で、肩甲骨の力を抜くと上半身がリラックスします。上虚下実（じょうきょかじつ）の状態です。首と肩甲骨の柔らかさが心の動きや笑いなどとつながっています。

次に、吐く息を長くする呼吸法（丹田呼吸法）を練習します。3秒吸って2秒保ち、15秒かけてゆっくり吐くというサイクルを6回くり返すと合計2分間。深くてゆったりとした息ができれば、心身が落ち着き、余裕が生まれます。息を吐ききることが非常に大切です。人はプレッシャーの渦中にあるとき、浅い呼吸になってしまいます。キレる、ムカツクというのは、プレッシャー状況で、処理しなければならない事柄が増えても対応できない、お手上げ状態のことです。しかし、これも、訓練によって自分の容量を大きくすることが可能です。あえて、プレッシャーを設定し、それを乗り越える感覚を覚えるのです。そうすることでプレッシャーに強くなっていきます。

型を覚える

野放しにさせることが自由なのではありません。型、それもレベルの高いものを覚えることによって自由さが増すのです。しかし、無意識な反復練習を繰り返していては、型を覚えることはできません。たとえば、バスケットのシュート練習で、むやみにいろんな角度からシュートするのではなく、右利きの人の場合、右45度の角度からばかりを繰り返します。そうすることで、自分の中に基準を蓄積していくことができます。2万回くらい繰り返すことで型が身につくと言われています。



型が身につくと、才能の有無に関わらず、ある程度のレベルまで達することができます。たとえば、手紙の書き方も定型を知っている方が書きやすさが増しますし、スポーツでも身につけている技が多い方がプレーが自由になります。子どもにとっては、目的に沿って有効に機能する型を作ってくれ、それが機能しなくなれば設定し直してくれる大人の存在が必要です。

レスポンス（応答）できる身体

人との関係性の中で、自分の身体を感じ取るということは、大人も子どもも同じです。たとえば、キャッチボールでも、自分の投げたボールをしっかり受け止めてもらえると心地よいもので、続けていると元気がよくなります。人とやり取りしながら、心身が応答し、増幅していくのです。ですから、子どもと付き合う大人や先生がもっているリズムは、その場の雰囲気を作っていきます。

そうして、レベルの高いものにチャレンジしている自分に誇りをもつことによって、自己肯定感が高まります。あるいは、自分の好きな分野で力を出しきること。莫大な量をこなすと質的な変化をもたらすことになります。そして、エネルギーを出しきる感覚を自分の中に定着させるのです。エネルギーも呼吸と同じで、出しきると自ずと入ってくるものです。眠りが深くなり、目を覚ましたときにグレードアップし覚醒される。身体リズムの循環がよくなり、精神的に充実していきます。

国際社会では、自分を出していくことが不可欠です。身体と呼吸、言葉、そして表現することは、身体の軸を通してつながっていますから、自分に誇りをもって生きるためにも、身体のことを知り、カンを磨いておくことです。

子どもたちは、「しゃべりたい」「歌いたい」「動きたい」という欲求をもっています。ですから、それらのエネルギーを出しきると情緒が安定します。

パドマ幼稚園で実践しているのは、朝、登園するとまず、「体育ローテーション」という流れの中で身体を動かした後、部屋の中では、俳句や和歌、漢詩、般若心経などリズムのよいものを朗唱したり、歌を歌います。

子どもたちには強制して教え込みません。有効な流れを設定すると、子どもたちは集団で愉快に関わりながら、他の人のリズムと自分のリズムとをすり合わせていきます。そうすることで、秩序や法則を覚え、高め合っていく力をもっているのです。

（秋田光茂さんによるコメント）

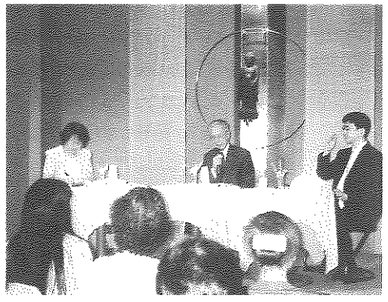
Event Report

聴講を終えて——藤崎由紀子

型を身につけることによって自由さが増すというのは、時間をかけてピアノ奏法を学んでいく過程にも通じます。また、人の前で演奏する際、緊張をほぐすために、ゆっくりと息を吐くというのもピアノ演奏を通じて身に付けた習慣の一つです。私にとって、ピアノや音楽に関わる時間をもつことが、自分に誇りをもって生きることにつながっている、と、齋藤孝さんのお話を伺って再認識しました。

一方で、現在、小4の子どもをもつ親の身としては、もう一度幼少期に戻り、パドマ幼稚園に入るところからやり直したいという思いにもかられました。女性が、そのライフサイクルの中で、自尊感情を失わずに自分自身をも育て続けること、そして、子どもを産み育てること、この二つを両立させることは永遠の課題かも知れません。

※藤崎由紀子（ぴあの&トーク主宰、ピアノ奏者）：出産・育児で音楽活動を一時中断後、1996年3月より赤ちゃん連れでも楽しめる“ぴあの&トーク”として音楽活動を再開。ピアノによるコミュニケーションを提案、実践を続けている。大阪市在住。
http://www4.ocn.ne.jp/~piano/

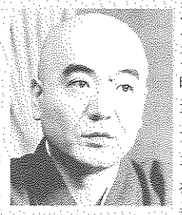


7月23日開催の第33回寺子屋トークは、芥川賞作家・玄侑宗久さん（臨済宗妙心寺派・福聚寺副住職）がゲストとして出講、「不可思議と向き合う～僧侶として、小説家として」をテーマに語りました（参加者134名、協賛：教化情報センター21の会）。

あたたかいお人柄がしのばれるような語り口で、「宗教」と「文学」が一体となった世界の拡がった2時間半。また、終了後のサイン会で、大勢の参加者一人ひとりに、ていねいに言葉をかけておられた玄侑さんが印象的でした。

当日、第2部で公開インタビューを行った川副春海さんの感想をご紹介します。

※当日の内容は、10月末発行予定の『現代教化ファイル』（教化情報センター21の会発行）第8号に収録される予定です。



玄侑宗久さん

1956年、福島県三春町生まれ。安積高校卒業後、慶応義塾大学中国文学科卒。さまざまな仕事を経験した後、京都、天龍寺専門道場にて修行。現在は臨済宗妙心寺派、福聚寺副住職。福島県警通訳（英語・中国語）など。

デビュー作の『水の舳先』（新潮社）で芥川賞候補になり、2001年『中陰の花』（文藝春秋）が第125回芥川賞を受賞。現代社会が抱える精神の“ぶれ”を描いた『アブラクサスの祭』（新潮社）に続き、2002年2月、貨幣に関する根源的な思考を問い直す新作『化蝶散華』（新潮社）を発刊。その他の発表作に、「新潮」2001年1月号に『宴』、「文学界」2002年新年号に『御開帳綺譚』、「文学界」2002年5月号に『ピュア・スキャット』。

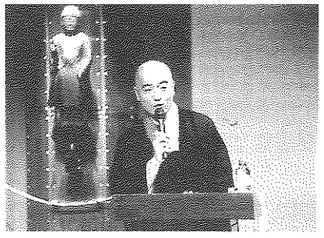
われわれの時代の坊さん

川副春海

ワールドカップのスーパースター・イングランドのベッカムは、日本ではライト・モヒカンの髪型で戦った。ベッカム様の動静はマスコミでも詳報されるので、一時期、彼がスキンヘッドで人気を博したことを知っている人も多いだろう。

坊主頭は仏教僧の専売特許だった。戦後一時期まで剃髪姿で街を歩くのは、僧侶以外には極道か新兵しかいなかった。風向きが変わったのはバブルの頃だろうか。パンク・ロックの連中だけでなく、あろうことか何よりも見栄え重視、ビジュアル系のロック兄ちゃんにも坊主頭が進出した（もっとも髪の色が違っていたりするが……）。

髪は欲望の象徴だったはずだ。髪に剃刀を入れ、青々とした頭になるのが、虚飾を剥ぎ欲望を捨てる象徴だった。邪淫や飲酒（仏教では「おんじゅ」と読まなくてはならないが）を戒め、エッチで獣にもならず、お酒で口角泡も飛ばさない、そんなお坊さんが、この二千数百年来の期待される僧侶像なのだ。



戦後文学者で僧侶だった武田泰淳は、名作『快楽』で肉欲とマルクス主義、それに戒律という究極の矛盾に、ぼろぼろになるまで恥じ、悩み果てる禿頭の青年僧を描いた。三島由紀夫は『金閣寺』で、美しさに嫉妬する小僧に、美の象徴「舎利殿」を炎上させる役回りを与えた。水上勉に出てくる寺の女性は、「日陰者」という言葉がぴったりくる。坊さんは、つい百年ほど前までは結婚しちゃ駄目だったのだから、寺に女性がいてはならなかったのだ。

いつの頃からだったのか、坊さんもまた若い女性たちから「わぁー、かっこいい」と指さされるようになった（急いで付け加えると、男の子と尼さんの関係も同様だ）。剃髪姿も、「解脱」だの「往生」や「覚悟」だのの言葉でいっぱいになっている黒い大きな空虚をかかえた難解なはずの出家の葛藤も、「すごーい」と一瞬のうちに消費される記号となってしまった。

思えば、トレンドになった劇画『陰陽師』の漫画家岡野玲子さんが80年代に描き、映画化された漫画『ファンシイ・ダンス』あたりからだったのかも知れない。フツーの女の子にとっては、主人公陽平クンがコンサバ世界である仏教界に生きようとするいじましさって、やはり「かっこいい」のだ。

應典院のイベントで、作家玄侑宗久さんにインタビューした。玄侑さんは、芥川賞を昨年受賞した作家だが、常々それよりも前に僧侶であると公言されている。これまで書籍として刊行された四冊の小説すべてが、僧侶が主人公だ。『中陰の花』のおがみやさんも、『アブラクサスの祭』のロック坊さん浄念さんも『化蝶散華』の老僧も乞食さんも、私の寺の日常に転がっていて、いわば人ごとではない小説世界だ。

玄侑さんがこの世に生を与えられた四人の坊さんが大好きだ。

株で失敗して出家した『化蝶散華』の理洲さんは、お布施の意味を必死で考える。

『アブラクサスの祭』の玄山さんも、狂気を問いつめる。坊さんなら誰だって悩んで、そのうちほうり投げてしまうテーマを、マジに説き明かそうとする。

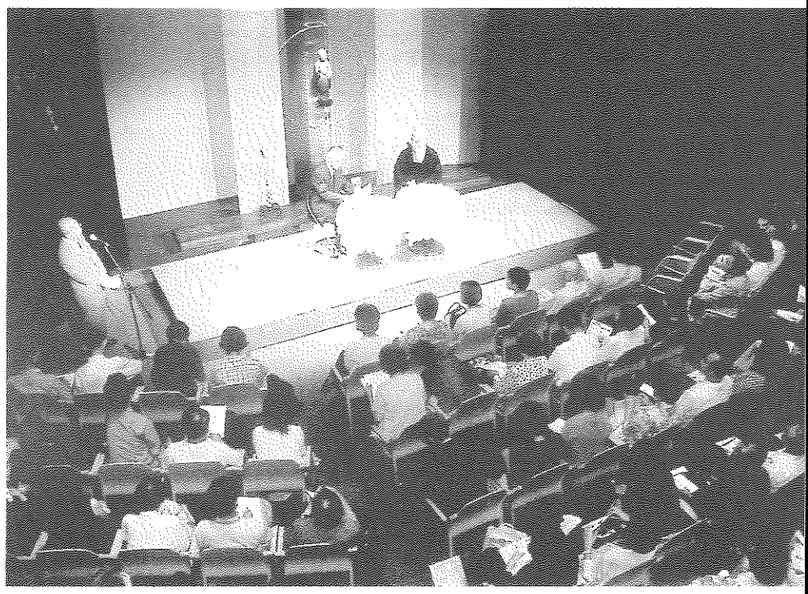
『中陰の花』則道さんの奥さん圭子さんは、流産した子の供養に本堂いっぱい紙縒（こより）を作り続ける。供養をする前に入った住職夫婦のお風呂の会話なんて、泣きたいほど美しいシーンだと思う。

建前ばかりの仏教にあって、「邪淫盲語」も「飲酒」も軽く受け入れた上で、さて三千世界の神秘も来世観もこうなんだと柔らかく指し示してくれる、われわれの時代の坊さんなんだと思う。逆にまた、玄侑さんのお寺ワールドは、いかにこの時代でも簡単に「消費」させないヤワな空間ではないのだ。

これからもお寺の本堂から庫裏から、この時代の身の丈にあった仏教を提示してくれると思う。次回作『アミターバー無量光明』（「新潮」11月号所収予定）がいまから待ち遠しい。

川副春海さん

『現代教化ファイル』発行人、浄土宗専称寺住職）：1979年、佐賀新聞入社、記者を務めた後、85年に退社；2年間、アジア、欧州へ、帰国後、実家の浄土宗専称寺副住職、今年より住職就任。地元のラジオ局でリスナー参加番組のパーソナリティを務める。著書に「仏教ことば博物館」など。



表現の大地から、まだ見ぬ〈原石〉を掘り出そう!!

舞台芸術祭SPACE⊠DRAMA2003 いよいよ始動!

舞台芸術サポート事業・最大のイベント［舞台芸術祭SPACE⊠DRAMA2003］が、いよいよ始動いたしました。昨年までと大きく異なる点は、大きく3つ。第1は應典院寺町倶楽部およびシアトリカル應典院の2者が主催していること、第2は参加団体の公募、そして第3は公募対象劇団の活動年数を「5年以内」としたことです。5年以内とは、経験を重ねながら集団として大きな転機を迎えている時期だといえます。

支援期間は約2年。劇団との対話を重ねつつ、まだ見ぬ〈原石〉を掘り出そうと私たちは考えました。そしてそれは、演劇というフロンティア（未開地）に対する挑戦なのです。

「演劇の、小劇場の波は過ぎ去った」とささやかれて久しくなり、劇場が消滅し、稽古場の数も減るなど、演劇を取り巻く環境は刻一刻ときびしいものになっています。

それでもなお、「演劇だからこそ表現し得る自分があるのだ」と立ち上がれる演劇人こそ、演劇界の次世代を担うに違いありません。そんな、真摯で熱い想いをもった演劇人たちに、出会いたいと思います。参加団体のラインナップは10月末に決定。どうぞご期待ください。

☆参加団体募集中！ 最大7劇団を選出します！

演劇活動をしている劇団で、2002年9月1日の段階で活動年数が5年以内、演劇主体の表現方法を行なっていることが基本条件。

☆開催期間は 2003年7月から9月の3ヵ月間！

・2003年7月14日（月）から9月10日（水）までの月～水曜、3日間のウィークディ公演。
・公演期間中、3ステージ以上の公演を行ない、かつ1回以上のアフタートーク（観客との対話の場）を設定すること。

☆会場使用料の割引（3日間で10万円）など、活動環境のサポートをします！

・優秀団体には、2004年度に三者協働プロデュース公演を！
・2003年度の優秀作に選ばれた団体は、翌年の舞台芸術祭開催期間中、週末に上演。
・三者とは、劇団・シアトリカル應典院・應典院寺町倶楽部のことです。

◆申し込み・お問合せはこちらへ！

※公募〆切：2002年9月20日（金）

〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27 シアトリカル應典院内「舞台芸術祭事務局」宛
（担当：川井田、柳澤）
TEL：06－6771－7641 FAX：06－6770－3147 E-mail：info@outenin.com

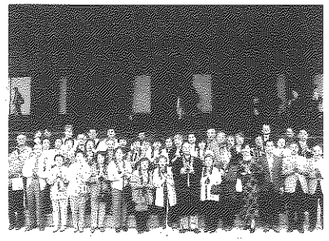
秋田住職発 應典院掲示板

8月はお盆の月。ITだデジタルだといいながら、一千何百年来、ご先祖さまに手を合わせる習慣は、綿々と続いています。

たいせつな何かを自分に気づかせてくれたり、思い起こさせてくれたりする存在を「他者」といいますが、究極の他者が「死者」なのかもしれません。死者はけっして書籍のように言語を持たないし、人間のように具体的なかかわりを持たない。けれど、それぞれの胸中に深い記憶を偲ばせながら、言葉には置き換えられないようなメッセージを残してくれます。「メメント・モリ」とは、ラテン語で「死者を想え」の意味ですが、死者との交流は時代を問わず、すべての世界に共通する他者との交感でもありました。

私たちはいま未曾有の超高齢社会を迎えています。当人もまたその家族も、長く死と向き合わざるを得ない時代、他者としての死者に何を学ぶことができるでしょうか。

■25霊場巡拝、7年目でついに成満！



97年10月以来、足掛け7年をかけて実施してきた「法然上人25霊場バスツアー」が、去る5月26日を持って無事成満となりました。参加42名。

法然上人の念仏の遺跡25霊場を巡る旅は、遠くは三重県、徳島県まで足を伸ばし、全11回、のべ442名の参加というものでした。最終回は、京都市中の大本山清浄華院、金戒光明寺、誓願寺、そして総本山知恩院でゴールとなり、全員で感激の記念写真を撮りました。

■ミュージアム都市・大阪

大規模な文化施設が建築される一方で、文化によるまちづくりが注目されますが、去る6月6日、シンポジウム「活動するミュージアムとしての大阪」が、当山で開催、行政、企業、大学などジャンルを超えた約150名が参加しました。

主催は大阪市大橋爪紳也氏を主査とする大阪ミュージアム文化都市研究会で、事例として築港の赤レンガ倉庫「アーツアポリア」、中津のサロン・ド・天人、空堀地区の長屋再生のからほり倶楽部などが紹介され、その後、横浜国大の大原一興さんらのシンポでしめくくりました。

むろん会場として指名された應典院も、大阪の文化の拠点。まちや社会に欠かせない場として、いっそうの注目を集めそうです。

■米国テロ1周年に平和を誓う

昨年の米国同時多発テロ1周年を期し、三帰会主催の「仏教者による平和誓願の集い」が、9月10日、一心寺三千仏堂で開催となります。三帰会とは、下寺町の若手僧侶の会で、私もメンバーの一員。

世界を震撼とさせた大事件でしたが、同時に「宗教」とは何かという大きな問いかけもあったことは事実。当日は僧侶、市民など仏教者が一堂に会し、平和を誓う音楽法要と佛教大の藤本浄彦さんの記念講演を行います。会場の三千仏堂は今年5月に新築になったばかりで、幅25mの巨大な壁画仏は見る者を圧倒します。参加は無料ですので、この機会にふるってご参加ください（詳細は同封チラシをご参照ください）。

■9月のアート・レクチャー

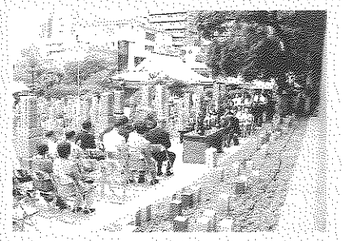
研修シーズンの9月には、日本仏教福祉学会をはじめ仏教教団の講演で走り回りますが、同様にアート関係のセッションにも参加します。

9月1日には、トヨタアートマネジメント講座「アートマネジメントを動かす力」の分科会「ホットな場づくりの挑戦」のパネリストとして参加、3時間の長丁場です（TAM名古屋セッション事務局電話0564－25－2992）。また、9月21日には、「エイブルアート・ワークショップ神戸2002」のパネル討論「場をつくるということ」にも参加します（エイブルアート・ジャパン事務局電話03－3364－2140）。個人的には、講演よりセッション形式の方がずっとのれるので、当日が楽しみです。

生前個人墓「自然」、開眼式が挙行！

既報の通り、去る7月14日、大蓮寺の生前個人墓「自然（じねん）」が竣工、開眼式を盛大に執り行いました。自立した個人同士を結び、墓を媒介とした結縁のネットワークを育てることこそ、「自然」の目標。そうした生前の交流を通して、人々が互いに支えあい、拝みあうような、もうひとつの家族づくりを目指します。

建築には、監修に一心寺住職・造家建築研究所主宰の高口恭行先生、デザイン・設計には京都造形芸術大助教授の荒川朱美先生が担当、清新な墓苑として好評を博しています。



また、「自然」と同時に、エンディングサポート系のNPO6団体と協同して、人生の完成期を支えあうコミュニティサービス「エンディングサポート」も開始、お墓がコミュニティ再編の絆となります。

宗派は問わず、どなたでも申し込むことができます。資料は大蓮寺までご請求ください。電話06－6771－0739。